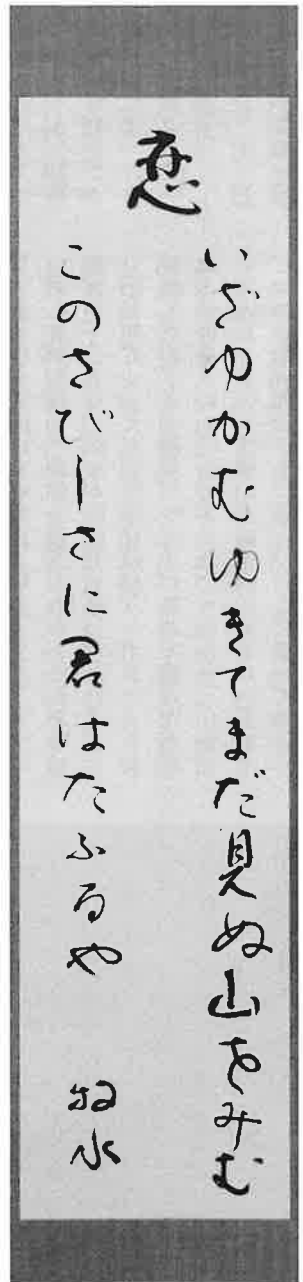


沼津市若山牧水記念館

第23号 1999.11.1

編集・発行 社団法人 沼津牧水会 TEL(0559)62-0424
〒410-0849 沼津市千本郷林1907-11 FAX(0559)62-0424



若山牧水「恋」の軸

いざゆかむゆきてまだ見ぬ山をみむ
このさびしさに君はたふるや

前館長で牧水の長子若山旅人氏が亡くなられた折、秘蔵の軸一本が長女榎本篁子さん（現沼津市若山牧水記念館館長）に遺された。半切の頭の部分に「恋」と大きく書き、下に冒頭の作品が書かれている。明治四十三年に出版された第二歌集『独り歌へる』の上の巻の巻頭に置かれ、実質的な出世歌集となった第三歌集の『別離』では、下巻の冒頭に置かれている歌で、その位置から考えても牧水が気に入っていた作品といえよう。

この歌は、明治四十一年四月十四日の友人鈴木財蔵あての手紙にある。「昨夜、君へ書いたあと、すぐその筆で女へ書いた、ずるぶんと無茶を書いた、が、要するに戀しいのだ、その手紙の端へ歌をも書き加へた、なか／＼いゝのがある。手紙は破つたが、歌だけはとつてある…」

その十首の歌の冒頭の作品である。この頃、牧水は園田小枝子との愛に燃え上がっていた。牧水の青春歌はほとんどこの頃に作られたものである。『独り歌へる』のこの歌に続く歌は、みんなみの軒端のそらに日輪の日ごとかよふを見て君と住むおのづから熟みて木の實も地に落ちぬ戀のきはみにいつか来

にけむ

女あり石に油をそゞぎては石焼かむとす見るがさびしきで、恋の極みにその果てを予感するはかなさが既に漂っているようでもある。予感のように、燃えれば燃えるほどに牧水は複雑な人間関係に傷ついていく。前掲の「昨夜君に書いた」鈴木財蔵への手紙には「…要するに君、バカに今夜は淋しい晩だ、僕は君或る一人の女を有つて居る、その女をいま自由にして居る、また、されて居る、戀といふものさうだ、こんな状態にある両個男女間の関係を、なんといふ寂しいものだらう…」と書いている。前年の十二月末に小枝子とともに房総の根本海岸に十日余り滞在、そして四月二十五日にはともに武蔵野を歩き百草園に泊まつたりしているのだが。

この半切に牧水が「恋」と命名し、秘蔵していたことに私は興味を感じている。恋に殉じるようにほろほろになるまで燃え上がり、更には命を削るような別れを経て、やがて立ち直っていく牧水が愛の象徴のようなこの作品を書いたと言うこと。更には長子旅人氏が、大事に秘蔵していたこと。そこに牧水の自己の純粹さに対する憧れを感じ、その父の憧れを引き継ぐように旅人氏が死の際まで手放さずにいた重さ。更に形見分けの中から篁子館長がこの作品を真つ先に手にしたと聞くと、事実を越えた真実の姿を垣間見たように思つたのである。

この半切は、館長の好意で記念館に預託されて、日の目を見ることになった。一見して欲しい逸品である。（須永 秀生）

牧水随想 空

榎本尚美
(元国立相模原病院副院長)

春の雲空かきうづめ光れる日
飛行機ひとつかけりゆく見ゆ

プロペラのひびきにまじり聞え居り
春の真昼の吾子が泣きこゑ

いとかけりく春の青樹のこずゑ揺れ
飛行機は雲に消えゆきにけり

飛行機を見送りはてて立ちあがる
身に寂しさの満ちてゐにけり

これは、牧水が生れて初めて飛行機を見た時の歌である。それは大正四(一九一五)年三月に三浦へ転居してからの事で、まだ飛行機が珍しい時代であった。詞書は「はじめて飛行機を見る」である。近くの横須賀(追浜)には海軍の航空基地があったが、そこから飛んできた飛行機であろうか、初めて見た飛行機は二歳の長男旅人の泣き声に気をとられている内に、空の彼方へ飛んでいってしまったようであるが、この歌は歌集『砂丘』に掲載されている。

因みに、日本海軍では大正元(一九一二年)一月、フランス製とアメリカ製の水上機で、金子・河

野両大尉が初飛行して以降、航空機の研究を続け、横須賀海軍工廠で純国産の飛行機が完成したのが大正六(一九一七)年であった。

初めて飛行機が空を飛んだのは明治三六(一九〇三)年二月一七日の朝、米国人ノースカロライナ州キティホークで、ライト兄弟手作りの飛行機により最初の飛行時間は一二秒、距離は三六・五メートルである。その約一〇年後に起こった第一次世界大戦(一九一四〜一九一八)で、エンジンの回転と同調してプロペラの間から弾丸が発射できる機関銃を考案したのは中立国オランダの飛行機製作者アントニー・フッカー(Anthony Fokker)であった。そして飛行機による空中戦が行なわれ、ドイツの空軍士官マンフレート・フォン・リヒトホルフェン男爵(Von Richthofen 一九一七〜一九一八)のような八〇機撃墜という英雄も現れた。我が国に於いても第一次世界大戦の折、中国山東省青島を拠点とするドイツ軍に対して飛行機から爆弾を投下したが、その総数は海軍が一九九発、陸軍が四四発であったという。昭和四五(一九七〇)年にはジャンボジェットが就航したが、その胴体はライトが初めて飛んだ距離の二倍の長さの七〇メートルであった。

因みに、ジャンボ機の垂直尾翼の高さは一五メートル、ビルの四階に匹敵する。また、そこに描いてある日

本航空の鶴のマークは直径が五メートルである。これは、米空軍の大型軍用輸送機設計競争に応募して不採用になったボーイング社が、それを民間用に転用した747型旅客機で、五〇〇人を一時に運べる大量輸送時代の幕開けであった。ボ社は軍が不採用にしたおかげで多大の利益を上げた……いわば、禍を転じて福となしたといえよう。なお、この時、軍に採用されたのはロッキード社の大型輸送機C-5ギャラクシーであった。



横田基地に駐機するC-5ギャラクシー輸送機

我が国はボーイングB-29による無差別爆撃によつて、沼津市もそうであったように、第二次大戦中壊滅的な損害を受けたが、現在は同じ会社の747の恩恵を受けているといえようか。

さて、先の牧水であるが、大正九(一九二〇)年にイタリアの飛行機が東京へ飛来した折、代々木の原でその着陸を待ち、

汝^なを待ちつつ青草原にわが置ける
時計はひびく真昼近しと

うるはしきその飛行機はありありと
わがまなかひに翔^まひうかびたれ

伊^い太^た利^りの旗^はじ^るし染^めてまなかひに
翔^まひうかびたりその飛行機は

と、詠んでいる。(歌集『くろ土』「伊^い太^た利^り飛行機」)
その詞書は「永き間わが興味をひきたりし伊^い太^た利^りの飛行機遂に六月三十日代々木原に到着す、当日早朝より其處に待ちて」であるが、前から興味をもっていたとはいへ、飛行機が来るのを原つばで朝早くからお昼近くまで待つていたのだから、牧水の好奇心も相当なものだったわけである。

日本の航空史(上)(朝日新聞社刊)によれば、これはイタリアのフェラリン及びマジエロ両中尉の操縦する二機のアンサルドSVA5複葉機で、二名の機関士とともにローマを二月一四日に出発、南方空路約一九、三〇〇kmを一日かけて五月三十一日に日本へ飛来したとある。

牧水は詞書に六月三〇日と記しているが、正しくはその一ヶ月前であったのではないか? 牧水はこの年の五月一日に東京を出発して群馬県の川原湯温泉に二〇日まで滞在、その後、渋峠を越えて長野県に入り、木曾、名古屋方面に遊んで二八、九日頃帰京している。従つて三十一日には東京にいたと推定され、飛行機を見に行つたとしても、時間的な矛盾は認められない。次のはこのとき同時に詠んだ歌である。

青草^{せうそう}の五月^{ごご}の原^{はら}をとどろとどろ
うちとどろかし飛行機^{ひこうき}くだる



牧水の時代には想像もつかなかつた巨大な機体が空を飛ぶ

私どもの手元に牧水所蔵の歌集『くろ土』初版本がある。その詞書も「六月」となっている。日付の間違ひは初版からだつたようである。そして、この歌の後に牧水の字で括弧して(六月三十日)という鉛筆書きの記入がある。

また、題の「伊^い太^た利^り飛行機」の後に鉛筆で「来」の字が付け加えられている。

この鉛筆書きの(六月三十日)は何を意味しているのだろうか?

自分の記憶違ひに気がついてか、それとも校正の違ひに気がついてか、これを訂正しなければとマークしたのか……

或いは、「五月の原」と詠んで六月では変に思つてマークしたのか?

それとも、牧水はこの年の八月一五日には長年の希望が叶つて沼津への転居が実現したのであるが、その準備などで心のゆとりがなかつたのか?

今となつてはどうして間違つたのか、解明の仕様もない。

因みに、このイタリア飛行士の一行は日本で大歓迎を受け、その一機を日本に寄贈して海路帰国した。

次に出てくる飛行機の歌は、大正一一(一九二二)年、風の強い沼津で詠んだ歌で、歌集『山桜の歌』「雑詠」として掲載されている。

いかでかは出でて見ざらめ庭木おらぶ
この風の日にゆく飛行機を

続いて詠んだのは大正一四(一九二五)年七月二十五日の沼津であつた。

歌集『黒松』に掲載されている「訪欧飛行機送迎の歌」に「けふ七月二十五日午前九時三十五分、待ち待ちし二つの飛行機、富士のこなたの空に現る」の詞書のもとに一三首がある。

夏がすみかきけぶらへる足柄の峰の上の空ゆ飛行機来る

うらかなしき霞にもあれや真夏空
けぶらふなかに飛行機は見ゆ

富士がねのこなたの空を斜に切りて
二つうち並び行くよ飛行機

つかず離れず二つならびてかるやかに
静けくゆくよわが飛行機は

家族みな門にうち立ちまさきくと
祈りつつ送るその飛行機を

飛行機より眼おろせばまなかひに
静かなるかも畑つもののみり

これは大正九年のイタリア機訪日の答礼としての朝日新聞社主催の国民的壮挙であった。使用した飛行機はフランスから購入した単発、複葉（発動機一基、翼が二枚）のブレゲー一九型に燃料補助増加タンクを付けた「初風」と「東風」で、それぞれに操縦士と機関士が搭乗し、代々木練兵場を出発、シベリアを横断してモスクワ、ベルリン、パリ、ロンドン経由で一〇月二七日ローマに到着。九五日かけて

の飛行に成功したものである。

牧水が最後に詠んだ飛行機は、昭和二（一九二七）年の次の歌である。

飛行機が沖つ辺に低く見えにけり
海人は見てをり網引きながら

千本浜の長閑な情景であろう。雑誌『文学』四月号に掲載された。それは「翼よ、あれがパリの灯だ」で知られた米国人飛行士チャールズ・A・リンドバーグ（Charles Augustus Lindbergh 一九〇二〜一九七四）が単独で大西洋を横断し、ニューヨークからパリまでを三三時間三〇分で初の無着陸飛行をした年であった。

ところで、牧水は飛行機へ搭乗した事はなかった。斎藤茂吉の長子で同じく精神科医の斎藤茂太博士によれば、茂吉は牧水死去の翌年、昭和四（一九二九）年一月に初めて飛行機で空を飛んだ。

川崎ドルニエ・コメット機で二時間一五分関東の上空を飛んだが、その時茂吉が「虚空小吟」として「昭和四年十一月二十八日東京朝日新聞社の厚意により立川より飛行して吟詠を恣にす。便乗するもの土岐善麿・前田夕暮・吉植庄亮の諸氏及び予」の詞書きで約六〇首を詠んだ。その一部を記してみたい。

飛行機にはじめて乗れば空わたる
太陽の心理を少し解せり

雲のなか通過するときいひしらぬ
この動揺を秀吉も知らず

われより幾代か後の子孫ども
今日の得意をけだし笑はむ

直ぐ目のしたの山嶽よりせまりくる
カオス Chaos きびしきさびし
(注：Chaos ≡ 混沌…無秩序…曖昧模糊)

如何にも精神医学専門家の歌である。次もその時の短歌である。

電信隊浄水池女子大学刑務所
射撃場塹壕赤羽の鉄橋隅田川品川湾
丹沢の上空にして小便を
袋のなかにしたるこの身よ



空中競詠を試みた歌人たち
左から吉植庄亮、前田夕暮、斎藤茂吉、一人おいて土岐善麿



上空から見下ろした富士山

また、善鷹はこのときに次のような歌を作った。
たちまち正面から近づき近づく
富士の雪の光の全体

遠山の斜面と斜面の急角度の
旋回、雲のじのきれめに

東京のただ広き乱雑さ、
濛々たる温気の渦に窓をあけて

茂吉の丹沢の歌は現代の飛行機では到底考えられない。それにしても、ビニール袋等のなかった時代、茂吉は一体どんな袋を使ったのだろうか？ 昔は膀胱膜ぼうくわくまくという氷漚用の袋があった……窓から放尿すれば雲散霧消するのだが、衛生上の理由もあり、文豪にそのようなことをさせるわけにいなかったのだろう。

ヒトは一日に一日以上排尿するので、五〇〇人も乗れるジャンボが一二時間飛ぶとドラム缶一本以上になるから、一つ間違ったら大洪水だろう……と、文学を志す人とは違って、私どもは日常茶飯にこのような変なことを想像するので困る。茂吉はその日の日記に、飛行が終わった後に会った土屋文明から「飛行機二乗ルコトヲ諫メラレル」と記したが、飛行機はそれほど危険と思われていたのである。

なお、これは朝日新聞社の調査部長であった土岐善鷹が、四歌人の空中競詠として企画したものであるが、牧水が存命であったらその中に加わっていたであろうことを思うと、残念でならない。

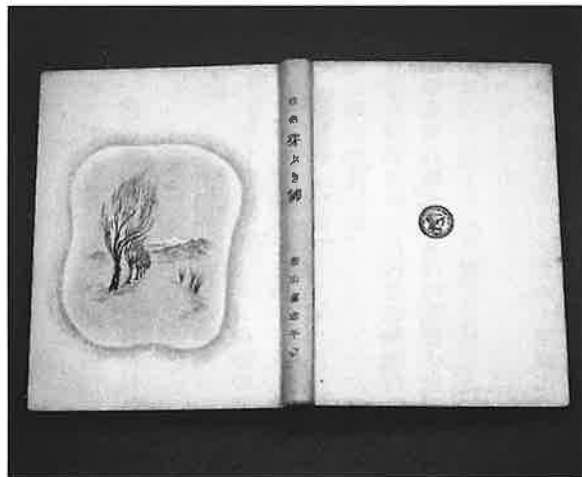
牧水が搭乗すると言ったら喜志子は何と答えたであろうか？ きつと好奇心旺盛な喜志子のこと、反対はしなかっただろうと思うが……。

その喜志子にも航空機に関する歌が多く見られる。沼津に住んだ頃歌集『埴鈴集』に「沼津は航空路の真下なれば」の詞書で

エンジンの緻密さなれか金鈴の
ひびきを含む重爆撃機

航空路を真上に住めば老人も
九二式八八式などいふも

次男富士人の子供の頃の頃を次のようにも詠んでいる。
飛行機に望遠鏡を向くる時
必ず呼びき母よ母よと



歌集『芽ぶき柳』装幀は長男 旅人氏による

昭和一四年に満州国へ渡った時の飛行機の歌も「芽ぶき柳」の「断想」と『全歌集』の補遺にある。

ユンカース86にて空ゆきし
旅は夢ならず現のおもひで

追憶は消すよしもなし遊覧者にて
我は異郷の空を翔びにし

赤土の南満洲を眼下に
見つつ平らかに今つきにけり

戦後立川の米軍基地の近くに住んだ時の歌も『芽ぶき柳』の「騒音」にみられる。

断間なき着陸離陸の騒音も
自然現象の一つの如く

笑ましもよ蟹がはさみをたたむ如く
車輪たたむを頭上に見たり

秋空の小車とんぼの錯覚よ
ヘリコプターの体は黄色く

航空機の発達は戦争とは切っても切れない関係があるが、参考までに日本の軍用機命名法について触れておく。軍用機は皇紀年号の下二桁をとってつけた。歌にでてくる九二式とは皇紀二五九二年つまり昭和七（一九三二）年に、八八式は皇紀二五八八年（昭和三（一九二八）年）に制定された軍用機のことである。有名な海軍の零式戦闘機（ゼロセン）は皇紀二六〇〇年（昭和一五（一九四〇）年）に制定されたものである。

海軍では昭和十七年以降数字による命名は止めて、「銀河」「彗星」「月光」「彩雲」「紫電」「桜花」というような戦争の道具には似つかわしくない優雅な愛称が付けられた。参考までに米空軍のDC-9型患者輸送機にはナイチンゲールというニックネームがつけられている。

因みに、八八式は川崎航空機製で、BMWの水冷式発動機を一基つけた複葉偵察機で、信頼性が極めて高い飛行機であった。

九二式は三菱製で四発単葉の重爆撃機である。幅

が四四呎、重さが二五・五ト、乗員は一〇名で威風堂々とした当時最大の飛行機であった。

また、喜志子が満州で搭乗したユンカースJ-1186輸送機は、ドイツユンカース社製の双発低翼単葉の乗員二名、乗客一〇名の新鋭旅客機である。

飛行機とともに、空を飛ぶものといえば飛行船である。これも牧水とその母マキとに些かの関わりがあるので記載しておく。



米空軍のDC-9型患者輸送機「ナイチンゲール」

本格的な飛行船といえればドイツの陸軍中将ツェッペリン伯爵(Ferdinand von Zeppelin 一八三八〜一九一七)が設計製作した硬式飛行船が有名で、この巨大飛行船はドイツ国民の誇りともなっていた。日本のタバコにも「エアシップ」というのがあり、箱に飛行船の絵が描いてあったが、父が早く世界した時、それを棺の中へ入れたので覚えていた。ツェッペリン飛行船には建造順に LZ (Luftschiff Zeppelin) ツェッペリン飛行船) という一連番号があった。その第一号は明治三三（一九〇〇）年に完成した LZ-11 である。第一次世界大戦中は一八九隻も建造されて、軍事的に偵察や爆撃などに用いられ、英国の首都ロンドンもこれの爆撃を受けた。

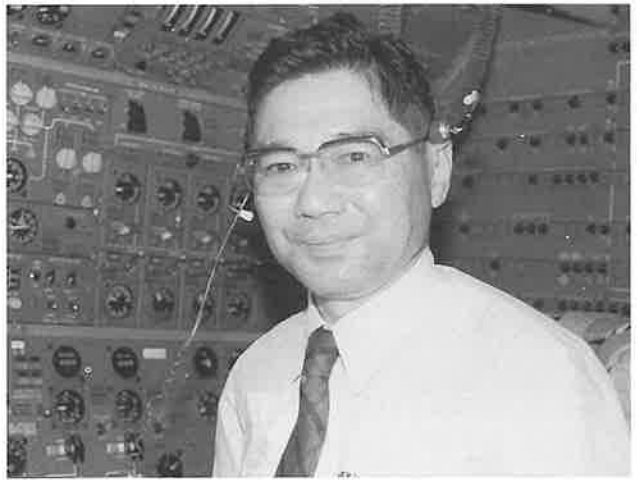
第一次大戦後も飛行船の生産は続行された。

世界一周の途中で日本に飛来した長さ二三五呎、直径三〇・五呎の大型飛行船 LZ-117 (ツェッペリン伯号) は牧水他界の翌日、昭和三（一九二八）年九月一日にドイツボデン湖畔のフリードリッヒスハーフェンで初飛行を行い、牧水の母マキ逝去の翌日、昭和四（一九二九）年八月一日にそこから世界一周に出発した。

奇しくもツェッペリン伯号の初飛行と世界一周出発とがそれぞれ牧水とマキの死去の翌日であったというのは、ヒコキキチガイの私にとって楽しい発見であった。

そして、アジア・アメリカ大陸経由で世界一周に成功した。日本では霞ヶ浦へ着陸し、東京・横浜上空を飛んだのが八月二〇日であったが、京浜地区の住民は皆空を仰いでツェッペリン伯号を眺めた。それは快晴の日であった。

もう日本人で、これを眺めた人も少なくなつたこ



コックピット内を見学する筆者（筆者は牧水の孫 篁子氏の夫）

とであるが、当時横浜に住んでいた四歳の筆者は、不思議なことに自宅の庭からブルンブルンという長閑な爆音を響かせて通過した、この不思議な因縁の飛行船をはっきりと覚えている。

ところで、飛行船というヒンデンブルク号の悲劇が思い出される。昭和一二（一九三七）年五月六日にフランクフルトから飛来したLZ一二九（ヒンデンブルク号）はニュージャージー州レークハーストで着陸係留時に爆発炎上した。これは、米国がドイツに対して飛行船に使う非引火爆発性で安全なヘリウムの輸出を禁止したことから、ドイツの飛行船は危険な水素を使うしかなく、その故もあって静電気の放電が爆発の原因と言われた。この事故以後大量輸送用飛行船の開発は顧みられなくなってしまった。

牧水は飛行船の歌は詠んでいない。ヨーロッパから飛行機が飛んできた時に旺盛な好奇心を見せた牧水であったが、ツェッペリン伯号飛来の時はもうこの世にはいなかった。喜志子も姑マキの外界で飛行船を詠むどころではなかったであろう。

私の最初の幼児体験は、凶らずも空を飛ぶものであった。私は飛行機の操縦は出来ないが、大学ではグライダー部へ入って、甲子園の浜で訓練を受けた。初めて操縦席に座ってシートベルトを締めた時はさすがに緊張した。今でも覚えているが、地平線より上の空が真っ黒く、地面が真っ白に見える、まるで赤外線写真を見ているようであった。現在の滑空機は何種類もの計器やスイッチがついているが、当時のプライマリーと称するゴムのパチンコで引く張つて飛上がらせるグライダーには計器は一つもなかった。水平儀の代わりに地平線を頼りに勘で操縦杆を動かすのであるが、先輩が操縦杆を引きすぎて機は失速し墜落大破、彼は踵骨（かかとの骨）骨折ということもあった。

戦争中、私も陸軍の依託生となり、卒業後は軍医と決まっていた。任官したら航空部隊に配属されたかと思っていたが、繰り上げ卒業の二ヶ月前に戦争に負けて陸軍士官になり損ない、お陰で今まで命を永らえている。

医師になつてからもヒコキキチガイは益々亢じ、ジャンボの模擬操縦装置に触れたり、学会等で出張するとき友人の機長の操縦するジャンボの操縦室を見学させて貰ったりした。勿論正式な「操縦室立入許可証」の交付を受けているが。

飛行機や宇宙船には点検表があり、パイロットはそれに従つてスイッチやレバーの位置等を確かめ、

事故を防止し、安全な飛行を行ない、生命の安全を守っている。私もそれを自分の仕事に応用してみた。すなわち、手術を始める前の患者の状態と、精密な麻酔器の点検の為にチェックリストを作り、三〇年間自分のもとより、研修医の指導にも用いて、絶対に間違いを起こさない、という信念で安全な麻酔を行なうことに心掛けた。

ともあれ、「牧水が飛行機に興味を持っていた」という記録を見たことはないが、詠んだ歌の様子などからも相当高度の関心というか好奇心があったと推定し得るのである。

参考文献

- 佐貫亦男 「人間航空史」 (中公新書)
- 斎藤茂太 「飛行機と共に」 (中公新書)
- 「日本の航空史」(上) (朝日新聞社刊 昭和五七年)
- 雑誌「周辺」(土岐善磨追悼特集 (昭和五五年一月))



操縦席に座る筆者

第十回中学生短歌コンクール

作品から見えてくる中学生の生活



今年も千四百八十二首の作品が市内十二の中学校から寄せられた。中学生短歌コンクールがまさに一つの行事として定着した感じで喜ばしい。残り五校だが、そのうち三校は去年までの常連校で、今年不参加が残念であった。

近年、短歌世代の高齢化の反動のように、全国各地で中学校の児童・生徒の短歌づくりが行事化されている。沼津水会の試みはその先駆けとも言えようか。そんな中から新しい青春の文学の生み手が芽生えることを願うものである。

今年の選歌は、沼津牧水会理事の青木朝子・曾根耕一・杉山芳春・須永秀生の四人で行った。特選の十首を紹介する。

スタイルの良い影のびるアスファルトちよつぱりしつと自分の影に

第五中 辻村聡子

風がふきみどりのいねのジュータンがやさしくゆれる

大平中 土屋政人

夏の日の朝

大平中 土屋政人

NATO軍ユーゴと戦いおわたがまだなんみんがのこつているよ

片浜中 小針洋介

暑い夏汗をかきつつ仕事する父の姿は輝いていた

門池中 岡田隆宏

アジサイの花にあつまるカタツムリ通り道にはシルクロードが

第五中 坂間愛美

ふしぎだね口ではいぬ言葉でも手紙にすると素直になれる

第五中 鷹頭香奈

水たまり長ぐつはいてわたつたらゆらゆらゆるゆる私の顔も

金岡中 三好由貴

あしたの緑もさえて晴天なりブルの精がキラキラおどる

浮島中 高橋菜摘

あさいちのひかりかがやきみずうみにきれいにうつる

片浜中 渡辺ゆみ

たぬきこの富士

自分の影に嫉妬する感性、稲田をジュータンと見立てるセンス、NATO軍と難民問題への関心、汗する父の後ろ姿を見る視点、カタツムリの銀色の通り道をシルクロードと見る面白さ、折れたひまわりから私はと転換する発想、水溜まりにゆれる顔。どの作品にも中学生らしい素直な感性と見方が生きていて好感が持てた。入選の四十首もそれなりに彼らの生き生きとした日々の断片が浮かび上がって現在の中学生の生活と関心の向きがうかがえて興味深く選を行った。入選の中の数首を紹介しよう。

日曜日家族がそろそろ晩ごはん次から次と言葉がつづく

第五中 横山敦子

父さんのビールをちよつと飲んでみてうまいと思つた

大平中 田辺郁恵

十三の夏

門池中 鈴木未希子

八つ橋をおみやげだよと供えても食べてはくれない天国の祖父

門池中 鈴木未希子

受験社会平和の中の戦争でその荒波に今立ち向かう

金岡中 河合亮輔

友達の声にまじつて君の声いつかは一緒に話してみたい

静浦中 鈴木良美

い

たいようからだぜんしんむけながらすくすくそだつ

片浜中 米田晃子

ひまわりのはな

大半の作品は、部活と夏休みが暑いことと花火、そして梅雨。本音は書けないのだから、本音が伺えるような作品も見なかった。ひらがなだけで書いた作品がどうしたところか多くて驚かされたのも今年の傾向。(須永秀生)